

シュライエルエルマッヘルの『聖降誕祭』について

武 安 有

一八〇五年（三七歳）二月上旬のある夜、デューロンのフルートコンサートから帰えって、暖炉の傍で身を暖めていたシュライエルマッヘルに一つの着想が閃いた。この突如たる靈感に駆られて、わずか二、三週間のうちに書き上げられ、翌一八〇六年（三八歳）一月にはすでに出版されたのが、この小品『聖降誕祭』である。

当時、彼はすでにハレ大学の教壇から、倫理学、神学等の体系的な講義をおこなっていたのであるから、そのような教授活動からすると、いささか逸脱しているとも思えるようなこの小品が、この時機になぜ生れたのか疑問に思える。

一八〇五年（三七歳）一〇月、すなわちこの小品が執筆される二カ月前、かねてより相愛の間柄にあったエレオノール・グルーノ夫人との間は、悲劇的な結末を迎えていた。この小品の完成は、こうした窮状から彼を救い出し、新しい人間に甦えらせることを可能にした。作中の人物、ヨーゼフは全体ではないが彼の分身でもある。ヨーゼフは

最後に、「すばらしい世界に新しく生れ変わったような気がいたしました」と喜びと感謝の念を素直に表明している。後年、一八一九年（五一歳）偶然、このエレオノーレ・グルーノ夫人に出会った時も、彼は彼女に向かって卒直に、その節の神の配慮に感謝している、と語っている。⁽¹⁾ Fr. シュレーゲルの轍を踏まなかったことを、彼等は心から感謝していたようである。

シュライエルマッヘルは、この小品でクリスマスを通して、家庭において繰広げられるキリスト教徒の交友を描く。シュロビッテンで家庭教師としてドーナ伯爵家ですごした優雅な家庭生活、ベルリンのロマンティカー達との文学的交友、ハレ大学での学問的交友、作曲家 J・Fr. ラインハルト家の楽友サークルの交友、いずれの場でも彼は中心人物として、人々と親しく交じわった。いろいろな人々との交じわりは、彼にとって日常の糧と同様に欠かすことのできないものであった。このような目的、利害等からは自由な交友生活の豊富な体験から、やがて彼独自の交友概念が形成され、わけでも倫理学、教育学において、この交友世界の占める位置の重要性が強調されるに至る。交友世界でわれわれに求められるものは、打ちとけた細やかな感情である。それは人間としての成熟を意味しており、家庭はこの感情を養う最初の間であって、家庭の女性はそれを養う役割を荷う重要な存在である。

クリスマスを讃美し、莊嚴化する宗教音楽についてのシュライエルマッヘルの理解は、主にヘルンフト兄弟団の学校と作曲家ラインハルト家での体験に基づいていると思えるのであるが、「美しいもの、聖なるもの」への感情を養い育てるのもまた主として家庭と女性の務めである。

彼はこの小品を、プラトンの対話篇に範をとって対話形式で書いている。彼のプラトン崇拜は熱烈で、Fr. シュレーゲルが見捨てたプラトンの翻訳を、一人で続けたのもその現われであり、彼自からが「この神のような男ほど、哲学だけでなく人間全体のことにおいて、最も神聖なことを、わたしに手ほどきして、これほど影響を与えた著作家はほ

かにありません⁽²⁾」と云っており、彼がプラトンから受けた外的、内的な影響は多大である。この小品にも現われる一と多、時間と永遠、存在と生成といったような表現内容もプラトンの影響によるものである。

祝祭の催される広間には、主人役のエドワードとエルネスティネ夫婦、その娘ソフィー、婚約者同志エルンストとフリーデリーケ、アグネストとその子供、青年弁護士レオンハルト、カロリーネ嬢等の主だった人達が集まっている。ソフィーは、いささか早熟で、その敬虔な心情は、時に周りの者から気づかれるほどであるが、彼女には全く自然で本性的なものである。宗教音楽への愛好もその心情の発露である。レオンハルトは、対話を活発に進めて、人々を退屈させないために啓蒙家、理屈屋の役割を荷わされている。

これらの人々が、聖なる音楽に、人を魅く話に耳を傾け、祝祭の宵をすごす。最初に三人の婦人が、それぞれのクリスマス体験談を披露する。エルネスティネは「母親は、わが子のうちに神的なものを捜し求め、愛する」、「すべての母親はマリアであり、母の愛は永遠である」と「母たること」について語る。母の愛が家庭にしっかり根を下しているとき、子供の教育もまた安定するのであろう。ファウストの「永遠の女性的なるものは我をひきて昇らしむ」という末尾の言葉が永遠の母性的なものとおきかえて読まれるとき、それは教育の根本を見事に表現したものと見えるのではなからうか。⁽³⁾

アグネスは「すばらしい瞬間」である「受洗」について、カロリーネは「新しい生命の甦り」である「新生」についてそれぞれ語る。これら三人の話を通して、結局この祝祭の意味が、新しい生命の到来によって、世界が新しくなること、つまり世界の「救い」にあること、さらに云い換えると、「キリストの生誕による世界歴史全体の転回」にある、とされる。⁽⁴⁾

つづいてレオンハルトは、この祝祭の意味を外的なことではなくて内的なこと、つまりキリストの生きた中味に

求め、「歴史に誕生した現実の存在者」として彼と共に、われわれが生きていることを主張する。

エルンストは、この祝祭の喜びが普遍的で内的で、「あらゆる喜びの根源」であるという。そしてこの喜びをもたず根源の者によって、われわれ人間は分裂・矛盾から調和に至ることが出来る。われわれは「救済者」を要請せざるを得ない存在である。彼のところにおいてはじめて、新しい生命と力を得ることが出来る。そのため「この祝祭を神聖なものとして崇める」という。まことに「わたしたちの心はあなたのなかに憩うまでは、安らぎを覚えないからである」⁽⁵⁾。

ヨハネの言葉、「神は言葉であり、言葉は肉体となって……」を引用したエドワードの話しは、この祝祭の讃美が終極的には、われわれ人間全体の祝祭にほかならないことを指摘して、分裂と矛盾に悩むべく運命づけられたわれわれに、「救い」が開示されるのは、われわれがうちに「生成と永遠の合一」を実現させるとき「生成流転と合一した永遠存在」に寄り頼むときである。この永遠存在の实在を、われわれは「恩恵」によってうちに確信することが可能なのであるが、教会はそれを容易に促がすことのできる共同体である。ここで、「永遠存在」、「人間の光」、「神人」として救済者その本質、祈りと愛によって、われわれを眞の自己自身に立ち帰えらせる。新しい生命に甦えらせて下さる方のために、祝祭は讃美、祝福されるのである。

「人間自身あるいは眞実な人間の原像が、キリストにおいて、歴史的現実となることが、シュライエルマッヘルの神学上の根本テーマ」⁽⁶⁾であった。彼のこの根本思想の根底には、「哲学的なもの」、主としてプラトン哲学が沈潜しているのであるが、歴史的、現実的視点からの思索は、彼をプラトン哲学に盲従させてはいない。⁽⁷⁾ 主張や論争を越えた次元に、新しく生れ変った人間として、「言葉にし得ない喜び」に溢れ、愛と祈りで万物を愛されるお方の足跡に従うとおとする。シュライエルマッヘル自身の心情と姿勢が、最後に登場するヨーゼフに託されている。この小品を終

始一貫しているものは「まことの人間的なものと、キリスト教的なものとは、一つであり、キリスト教的な喜びのうちに本当の人間らしさが全うされる」⁽⁸⁾という彼独自の強い信念である。

彼はこの小品の登場させた人物の各々に、直接的、間接的に自らの体験、思索を反映させている。その顕著な例として、自分の受洗名でもあるエルンストと名づけた青年の話には、自らの「根本概念が最も明確に反映されている」⁽⁹⁾と思われる。このことは、やがて後の本格的な哲学的、神学的著作へと結実させてゆくべきものの萌芽が、そこに内在していることを示すものといえる。例えば、W・ディルタイは、この小品がシュライエルマッヘルの教義学研究への最上の入門書である、⁽¹⁰⁾といっている。その意味で、この彼の唯一の詩的小品を単なる傷心を癒すべく試みられた作品とみなすべきではなく、むしろそのようなロマンティカーとしての自己と決別し、重厚で厳肅な体系家として発展してゆくべき転機の時に、必然的に生れたものと受けとるべきであろう。

内的危機を超越した彼を、その後待ちうけていたものは、一八〇七年（三九歳）ナポレオンによる、この自由精神の溢れたハレ大学の閉鎖であった。内、外より迫り来る荒波を、彼は真正面から毅然として受けとめ、「馬鈴薯と塩」⁽¹¹⁾が手に入るかぎりハレに踏み止どまって、学問研究と説教活動をつづけ、祖国の運命を見守る決意をして、ナポレオンに対する精神的抵抗を止めることはなかった。彼の祖国に寄せた忠誠と愛情とが、いかに多大であったかは晩年一八三一年（六三歳）、国家、社会に対する永年の功績の証しとして、彼の胸に輝いた赤鷲勲章がよく物語っている。

さて、この小品を今その内容に促して、四部に分け、順次その大要を紹介してみることにする。

注(1) Aus Schleiermacher's Leben. In Briefen. I, Berlin. S. 138, 1860.

(2) Schleiermacher 『Die Weihnachtsfeier』 Basel S. VIII.

- (3) 森田宗二『少年問題と少年法』有斐閣、二五五頁、昭和三八年。
- (4) Schleiermacher 『Kleine Schriften und Predigten』 I, Berlin, S. 454, 1970.
- (5) アウグスティヌス、渡辺義雄『告白』筑摩書房、五頁、昭和四一年。
- (6) Schleiermacher 『Die Weihnachtsfeier』 Basel, S. IXV.
- (7) M. Redeker Friedrich Schleiermacher Berlin, S. 122, 1968.
- (8) Schleiermacher 『Die Weihnachtsfeier』 Basel, S. XV.
- (9) M. Redeker 『Friedrich Schleiermacher』 Berlin, S. 118, 1968.
- (10) Wilhelm Dilthey 『Leben Schleiermachers』 1922. Berlin und Leipzig S. 775.
- (11) F. W. Kartzenbach 『Schleiermacher』 Hamburg. S. 93, 1967.

—

今宵のクリスマスを祝うため、主人役のエドワード、エルネスティーネ夫婦は準備に多忙であった。エルネスティーネの献身的な働きと配慮によって、集まった人達は楽しく語り合い、贈り物の交換をして、この聖なる夜をすごすのであった。

将来を誓い合ったエルンストとフリーデリーケ、青年弁護士レオンハルト、令嬢カロリーネ等は、はつらつとした若者で、男性論、女性論に話の花を咲かせて、この場に華やかな雰囲気醸し出す。女性の特徴が、献身と心づかいにある、と云われるかと思えば、『神、男を誠実に造り給えり、されど女はあまたの術策を探し求めり』と老いたるソロモンの言葉が引用されて賑やかである。

エドワードとエルネスティーネの早熟な娘ソフィーは、美しいものに喜びを感じる娘であるが、殊のほか音楽を愛

好して、今宵も来会者一同に美しい声を披露する。彼女の「祈りつつ歌い、一つ一つの音を慎しい愛情ではなぐくみ育てる。」(S. 8) ような歌いぶりに一同は感動させられる。彼女は、さらにもう一つの芸術作品と称して、キリスト生誕を祝して作られたクリスマススの細工物⁽⁸⁾ (Die Weihnachtsskulte) の前に、人々を案内して「キリスト様は、生命と喜びとが、再びこの世で墮落しないための真の保証人です。」(S. 10) と云う。敬虔な母エルネスティネにとつては、その点でも喜ばしい娘である。

再び彼女は、カロリーネのピアノ伴奏で、今度はフリーデーリケと一緒に聖歌を合唱する。それには、いずれも喜びや救いの感情、謙遜な祈りが表現されていて、敬虔な思いで聴き入る人々の心に「静かな満足と心情の安らい」(S. 11) とをもたらす。聴き終わった人々は、暫くの沈黙のあとに、やがて心が高いものに向かっていることに気づき、喜びの感情に溢れる。

やがて贈り物の交換が始まり、エルンストも婚約者フリーデーリケと共に、品々を手にしてことのほか今宵のクリスマススを喜ぶ。世を経てきたエドワードは、青年の歓喜と感激とに暖かい理解を示しつつも、人間の真の感激が、愛の感激さえもが決してかりそめのものや、高ぶりやすいものにはないこと、また真の幸福が「無邪気な信仰心と深い真心」(S. 12) に依ることを気付かせようとする。エルネスティネには、わが娘ソフィーこそ、そのような信仰心と真心の子であり、その天使のような心情が、母の美しく優しい感情を一段と高め、娘のうちに秘められた「神的なものの純粋な啓示」(S. 13) が、わが子への敬虔の念を自然に覚えさせるのである。ここに敬虔な信仰心と暖かい真心とに支えられた親子の姿が描き出されている。

家庭の主婦であるエルネスティネの教育観によれば、子供の人格教育には、特に男子の場合、男の手によって「勇気と逞しや」(S. 13) が養われ、ことにあたって進歩するために、「絶えざる努力と断念」⁽⁹⁾ (S. 13) とが必要

になることを教えなければならない。他方、母親の男子に対する役目は、個性の純粋な萌芽を素直に伸ばすため、また彼等の感情の高ぶりを自制させるため、母親らしい細やかな世話や心づかいを注意深くすることにある。

レオンハルトは、彼女の教育論に耳を傾け、ソフィーの無邪気な敬虔さに感動を覚えながらも、他方ではソフィーのような余りにも早くから片寄った心情の持主は、かえって女性としての幸福を損う危険があるのではいか、つまりその秀でた感受性や内面性の故に家族や知人との絆を絶ち、人間性を否定した尼僧生活を憧れたり、そうならないまでも激しい内的苦悩や混乱に陥るのではないかと憂慮する。合理主義者、レオンハルトは、弁護士らしく熱心に憂いを母親に説くのであるが、彼女の方は娘の内的成長ぶりを喜びこそすれ、彼女の内面になんらの不自然な傾向や歪みを見出さない。それどころか、娘の自然なる子供らしい生活に満足している。父親エドワードもまた、娘の「敬虔なもの」に対する態度が、虚栄、自惚、模倣、強制から出たものではなく、「美しいもの、同情を寄せるに相応しいもの、敬意を表するに価するもの」(S. 16)に対する彼女の態度と同じように全く自然で、彼女は生れつき敬虔な人であると思っている。

エドワードによれば、新たな信仰生活に入る契機は、多くの人の場合、人生の途上で体験するなんらかの挫折である。「限らないもの」(S. 17)の存在を自覚し、それとの交わりを新たに持つ者は、その時以来全き信仰生活に即入ることができる訳ではないにしても、彼は今や、「幼な子」のごとく新しい命を生き、光明に向かって歩むことができる。

信仰に生きる人間の「心の美しさ」その内面的、永続的なものを信ずる「心の高さ」が、尊い大切なものであることをレオンハルトも十分に認める。それにも拘らず、ソフィーのような少女を含め、信仰に生きる人間一般に、彼等の日常生活に現われる「最も醜悪なもの、すなわち極めて気まぐれな、途方もない虚妄にはかならないような宗教的

自慙」(G. 18)に直面して、彼は当惑せざるを得ない。このような現実を、自己の内的危機あるいは内的挫折として真に自覚し、自から超克してゆくことのできる者のみが、真に自己の信仰に日々、新たに生きることのできる「敬虔な人」なのであらう。

ソフィーのような少女が、外的、感覚的な形象、例えば、キリスト像、聖書にある神話・伝説めいた話等によって、しばしば内的混乱に陥り、誤まった観念を持つようになる危険性がある、とレオンハルトの憂慮はさらに続く。しかしそのような危険性は、両親の適切な家庭教育によって避けられることができる。

ソフィーは、音楽と同様に絵画を愛好する。歌い、描くことによって深い感動を表現する。「限らないもの」「美しいもの」の感動を、感覚的形象を通して表現し、それらへの憧憬の念を養い育てることが、人格教育の基本である。⁽⁴⁾この場合、レオンハルトが主張するごとく、聖と美に主従や矛盾、対立の関係はない。各々が、自己本来であることによって、それぞれの存在と機能を全うすることができる。われわれの「アイデア」追求、思慕の念は、止め難きものであるように、「永遠なるもの」「美しいもの」、「真なるもの」への深き心の傾きを抑えることは、生きること自体を否定することになりかねない。それぞれは、この人生において、われわれの心を真に深く動かし、豊かにするものとして、人間生活の根底に根強く結び合って、相互互含的な関係にあるものと考えるべきであらう。

すでにレオンハルトにとって、創造的人生とは、「芸術作品、美しき叙述、造形的なものと音楽的なものとの合一」(S. 21~22)である。美も聖も人生の避難所である以上に、より積極的に両者は共に人生そのもの、と云うべきであらう。

今宵とり交されている贈り物は、「宗教的な喜びの純粋な表現」(S. 23)であり、他と喜びを共にしようとする深い信心の現われ——品物を貸りてする真心の交換にほかならない。信仰に関わるいかなる論争も、純粋な心の喜びを

覺えないエルネスティー母子は、このような交換を通してかの共通の根源的な喜びにまで高まってゆくことができる。この根本的な喜びは、われわれをして真に人生を生きさせる。たとえ手痛い苦難に遭うとも。

エドワードもまた、カロリーネと共にこの根源的な喜びの人生における意味について、「わたしは運命に立ち向かつてゆき、傲慢、無礼と思われるようなあらゆる挑戦に、勇敢に対処できるのも、この気分(Die Stimmung)のお蔭です。この気分をだれもが持つてほしい。」(S. 23)と云う。彼を根底から支えるこの喜びの気分は、楽の調と共に、さらに生き生きと目覺される。彼にとつて音楽は、「宗教的感情に最も近くある」(S. 23)芸術である。深みより出ずる感情の直接的な表現は、楽の調となり、それに沈潜する者の魂を、心底から揺り動かさずにはおかぬ。魂の感動の極みに、安らいだ喜びの気分が生まれる。

エルンストは、「音楽は宗教的領域においてのみ完成される。……宗教的基盤なくしては、高度な音楽作品は生まれないだらう」(S. 24)と宗教と音楽の関係を主張する。音楽が宗教によつて高度化されるように、宗教もまた音楽によつて莊嚴化される。したがつて両者は共に、魂に属するものとして相互に高めあふ關係にある、といえるであらう。

アグネスも、あの敬虔な喜びから溢れ出る愛情を、わが子アントンの養育に日々捧げる婦人である。母親として彼女は、子供のうちに潜む「美しいもの、神的なもの」(S. 26)を求めるあの高い精神の働きに絶えず心を配っている。このような母の愛は、彼女の内的生命や心情の安らいと同様に、生活上のさまざまな事情によつて打碎かれたり、墮落させられることなく、常に「敬虔で謙遜な愛」(S. 26)としてありつづける。

聖歌に耳を傾け、贈り物を交わす祝祭の夜は、われわれを喜ばしくも嚴肅な思いに誘う。レオンハルトには、この清純なソフィーが今もの思いに沈んでいるようにも、喜んでいられるようにも思える。彼には、人生のさまざまな悲しみ

や喜びは、諦念の人にとっては同じものであるように思える。悲しみを知るが故に喜びを味わうのである。一方はすでに他方をうちに潜めている。「喜びと悲しみが、奇妙に交互にやってまいりまして、相争うのです。」(S. 27-28)とソフィーは彼に打ち明けるのであるが、これ以上なにかこの少女に求めるのは無理である。人生の深い広がりを経験するには、余りにも幼なすぎる。しかし、カロリーネからみれば、ソフィーのこの「幼な心」、すなわち「あらゆる気分と感情を受け入れ、全く純粋に自分のものにしようとする心」(S. 28-29)こそ尊いものである。これなくしては、「神の国に入ることはできない」(S. 30)のであるから、「幼な心」は単に彼女にとってだけでなく、敬虔な生活を送ろうとするすべての人にとって、最も大切なものである。悲しみといい、喜びといい、同じものの異った現象にすぎない、という人生の実相に徹する心を持つ者、なに事をも静かに受取る、という赤子の心を持つ者にのみ、新しい世界は開かれる、というのであろうか。

ところが失われ易いのは、この「幼な心」である。「子供の時分ほどには、もう卒直に喜び、楽しむこともなければ、子供の頃に心ときめかせたようなことも、もはやない」(S. 29)とわれわれもまた、しばしば嘆かないであろうか。子供らしい喜びを失い、人生の高い喜びを識することも美しい広がりを思念することもなく、徒らに世の浮沈に身を委ね、遂にはその晩節を失うということほど哀れなことはないのではなからうか。彼の人生の大半が、そのようにあって、さらに生涯の極みにおいてもなお依然としてそのような生活にひきずりまわされているとするならば、それは悲劇的というよりは、喜劇的というべきであろう。彼には、「老を迎えて、最後の清涼飲料として、その喜びの苦杯から飲み乾すことのできる「幼な心」」(S. 30)がなお残されている、というのであるから。しかし、この言はば第二の「幼な心」さえも飲み味わおうとする者のなんと少なきことであらうか。しかもその少数者でさえも、今わの際にまで到らなければ、すなわち幼少の頃のあの最初の瑞々しい「幼な心」を失なった後でなければ、この最後の

高い「幼な心」の喜びを楽しむ境地に達し得ないとは、なんとという素莫たる人生であろう。それほどまでに人生の大部分が、一斉のものが圧し潰されてしまうほどに、破壊的妄人の跳梁跋扈に委ねられている訳でもないであろうに。⁽⁶⁾

エルネスティーネの眼には、世の大方の男性が、最初の「幼な心」と最後の「幼な心」との狭間に、「激情と混乱」ととりつかれ、気紛れな荒らくれた生活をする者」(S. 30)としてしか映らない。不安の劣情に駆立てられ、最後の「幼な心」までもが無縁なものとなって、遂には醜惡な俗物下界が彼の終の住処となってしまう。

ところがそれに反して、女性には「両者が互いに見分けがつかないほどに結び合っている」(S. 31)と彼女は云う。女性には、人間味を喪失した機能社会に、杓子定規にぎくしやくと生きる男性のあの苦渋に満ちた狭間は存在しない。女性は、女性に特有なあの優美な感情の世界にあって、丁度水が円方の器に従うごとく生命そのものの流れに従って、神と世界の一斉を内的統一である全体として受容、表出することができる、というのである。

両性の精神的発達に相違いが認められる訳ではないが、男性が常に矛盾、対立する内外の世界に、奮闘、努力し、懺悔、改悛を余儀無くされるのに対し、女性は調和、統一の世界に安らう。一方が「キリストについて言い争っている」(S. 31)のに対して、他方はひたすら「キリストを愛し尊崇」(S. 32)する。このような両性のあり方からして、神的なものを直接に純粹に感受して、真に生活していくのは、むしろ女性であるといえるらしい。⁽⁸⁾

二

エルネスティーネは、少女時代のあるクリスマスの体験を語る。その話の中心は、丁度あの「マリアと幼な子」を連想させるような美しい敬虔な親子のことであった。安らいと慈愛に満ちた眼差を、じっとわが子に注ぎ、深い祈り

を捧げる母が、時折かわい、無邪気な幼な子に優しく言葉をかける姿であった。エルネスティネはその母子の姿に、これまで求めてきて、求め得なかった「聖なるもの (Das Heiligum)」を見出し、わが子のうちに「神的なもの (Das Göttliche)」を探し求め、愛する母の姿が永遠なものであるように思われた。彼女にとっては、この聖母が、「わたしの生涯と内的生活に、他のどなたよりも大きな影響を与えた方」(S. 35) となり、その後の家庭、信仰生活を決定的なものにしたのであった。

アグネスもまた、前の年、兄弟の家で祝ったクリスマスの夜を想い起す。その夜、その家の保姆と彼女の幼子に捧げられた贈り物、とりわけ幼な子に授けられた最大の贈り物、「洗礼」のことが、彼女には強く印象に残っている。

まだすべてを全く母親に依存し、言はば母のうちに生き、母の生活をわが生活としているような幼な子に授けられる洗礼のときは、「すばらしい瞬間」(S. 37) そのものである、とフェルディナンドは云う。一同に向かつては「今や、みなさん全員が、この幼な子の証人であると共に彼の生涯に新たな関わりを持つ友人となれるのです」(S. 39) と宣言して、幼な子のうちの宗教的心情が、いつの日にか自覚的にキリストの信仰にまで高められるため、聖なる儀式を居合わせた人達の喜びと厳肅な雰囲気の中で執り行ったのであった。それは幼な子のうちに「神のみ心」(S. 39) が宿り、「神的生命の高い誕生」(S. 39) へとさらに導びかれるための門出であり、愛と喜びと祈りの日にはかならなかった。

カロリーネは最後に、シャルロッテの家で行なわれた祝祭の様子を語る。その年のクリスマス、シャルロッテの家では愛し児が病気であったため、⁽⁹⁾ 例年のように趣向を凝したクリスマスを、みんなで祝うことに躊躇していた。愛し児の容体は彼女の献身的な介抱にも拘らず、もう時の恵みに委ねる以外に手の施しようがないほどであった。それでも彼女は、その奥ゆかしい品ある態度を失わず、落着いて振舞い、「苦悩の中にあっても、ささやかな喜びに生きる

ことほど美しい生活はないのですから、落着いて生活しましょう」(S. 42)と周りの人々に云うほどであった。愛し児の絶望的な状態にも拘らず、望みを捨てるようなことはなかったが、それでも時折襲ってくる内的動揺は、「もうわたしは耐え抜きました。この幼い天使がやってきましたあの神の国に、またお返ししましょう」(S. 43)といわせるのであった。

しかし、その後、萎れかかった蕾が、慈雨を受けて再び伸び出て花を咲かせようとするかのごとく、愛し児は微かな回復の兆を見せ、母親に最初の微笑をみせるのであった。彼女は、「この世が新しく生れ変わるこのおめでたい日に、愛し児も新しい生命に甦されるのです」(S. 44)と二重のみ恵みに感謝し、喜びのあまりに一人一人を抱擁するのであった。死を通り抜けてきたようなこの愛し児の新生(Die Wiedergeburt)は、今や、「その苦悩を通して純化され、高い生命に聖化されている」(S. 44)と彼女には思われ、「この子は、特別な恩寵の賜りもの、神の子です」(S. 46)と云わせた。その夜、人々の眼に映った彼女は、あの十字架の下に深い苦悩に悲しみ佇み、やがて神のような子供への喜びに改心する聖母マリアのようであった。そして今では、彼女のすべての苦悩と悲しみは、愛と信仰と希望とのうちに浄化されてしまっているように思われたのであった。

三

三婦人の話の後をうけて、男達の話しが順番に展開される。⁽⁴⁾

先づ最年少のレオンハルトがクリスマスを讃美する。この祝祭が「キリスト教の根源」(S. 46)であり、「世界宗教の創始者」(S. 46)として、「神の永遠の御意にもとずいて」(S. 48)この世界に遣わされたキリスト、すなわち

「歴史のうちに誕生した現実の存在者」(S. 36)としてのキリストが、この日に讃美、祝福されなければならないのである。この祝祭が、かかるものとして人々によって素直に、誠実に喜びと感謝で祝福されるとき、この祝福は「時代の歴史を越えて」(S. 48)祝いつづけられてゆくであろう。その際、われわれにとって大切なことは、この祝祭がその外形においてではなく、本来の意味において讃美される、ということである。それは丁度、われわれにとって意味があるのは、キリストの生きた中味であって、彼の外的なことではないのと同様である。

キリストが、今も変わらず死から甦がえて、われわれと共に生きているということ、われわれが「死の蔭の谷を歩むとも」⁽⁴⁾われわれと共にあるということ、この信仰に生きることが大切である。闇夜に燦めく一つの星が、あの夜の導き手となったように、この信仰こそがこの世の暗夜を歩く者の一燈となる。

ろうそくの燈は、今宵室内を穏やかに輝し、妙なる樂の調は人の心を安らいへと誘う。クリスマスにふさわしい飾りつけ、数々の贈り物は、殊のほか子供達は喜ばせる。祝祭を讃美し栄光を与えるために、すべてが準備され、その聖なる価値は家庭において、しかも子供を中心にして豊かに実現される。「この祝祭によって、キリスト教を讃美し支えるのは、主に子供です」(S. 50)とレオンハルトは云う。「幼な子」のようでなければ、幼な子の心を持つ者でなければ、この祝祭の継承者になれない、というところにこの祝祭、この宗教の「不思議な力」(S. 50)が秘んでいるように思える。

エルンストのクリスマス讃美は、レオンハルトの讃美を別の点から深めようとする。救い主、キリストの誕生を祝して、われわれがクリスマス讃美するのは、「われわれの内なるある情調と心術を鼓舞して、……喜びの気分を一層ゆたかにする」(S. 52)ためである。この内的な喜びは、普遍的な広がりを持つ絶対的な喜びである。その他の喜び、例えば誕生日の喜びのような、特定の人々の中でだけ祝福されるような限定された喜びではなく、それは「よく

燃え盛る火であり、遍く広がりゆく感情の迅速な躍動である」(S. 53)。したがって、内的な喜びこそが、「あらゆる喜びの根源である」(S. 53)。われわれが真心をこめていろいろ準備するのも、この根源的な喜びの気分を一段と引き立たせるためにほかならない。われわれの生命と喜びの根源の二者として救い主は、われわれをその慈愛をもつて自からの子供とみなす。ところがこの子供は、生成流転の現象界に生れきて、内外の激しい変化、分裂、矛盾に直面し、それらの深淵に臨んで戦慄を覚え、深い苦悩に陥らざるを得ない。しかし、彼はその根源の二者を通して、たとえこの現実から歩み出さなければならにしても、調和・統一に到ることが可能である。ここに子供としてのわれわれには、救いと望みが残されている。このゆえに、この混沌たる現象界にあって、かかる悲惨な状態から出発することができる。否この根源の二者による豊かな調和、真の喜びと生命にいたるためには、この現象界のいかなるものも避けないで、むしろそのような状態から歩み出なければならぬのであらう。なに事も、真なるものは、否定的要素の媒介なしには生じえないのであらうから。

この祝祭において、われわれは根源の二者に立ち歸えり、自己の生命の根拠と力を常に新たに自覚し直し、新しい世界に入ってゆくことができる。そのため新しい生命に生きる者は、「この祝祭を神聖なものとして崇め」(S. 55)喜々として無邪気に祝福する。まさしくその幼な子のごとき無邪気さ、純粹さが、彼を新たに甦えらせ、高い生命と内的な喜びに生きさせるのである。

最後の語り手、エドワードは、「はじめに言葉があった。言葉は神と共にあった。神は言葉であった。言葉の中には生命があった。生命は人間の光であった。そして言葉は肉体となって、われわれの中に住んだ。われわれは父の一人息子として、彼の栄光をみた」(S. 56)。このヨハネの言葉を通して、より霊的で高い次元からこの祝祭を讃美する。彼によると祝祭の対象は、「神であり、神と共にあって肉体となった言葉」(S. 57)である。そして、「言葉が

肉体となるということは、根源的、神的なものが、思想や認識となって現われる」(S. 57) ことにほかならない。われわれは、思想や認識との関わりの中で生きているのであるから、この祝祭においてまたわれわれ自身のすべてを祝福していることになる。

ところで、われわれ人間は、生成流転、栄枯盛衰の世に生きて、混乱、分裂、墮落に陥る存在であった。しかし、そのような存在者に、自己のうちに「生成と永遠の合一」(S. 58) を実現させることによって、“救い”の道が唯一つ開かれている。それは即ち「生成流転の世に生きる者として永遠存在を思念し、永遠存在において、この宇宙のすべてを瞑想し、いとおしむことである。変化・回帰する生成流転と合一した永遠存在だけを拠どころとすることでもある」(S. 58)。

この世の渦流の中で喪失する言はば真実の人間性を、われわれはどこで回復することができるだろうか。あの永遠存在を拠どころにして「自己のうちに高い生命と神の平和を持つことができる」(S. 58) のは、どこにおいてであろうか。究極的には、み恵みによる自己一人の自覚において、しかも突如たる自覚においてであるにしても、それを容易に促がし可能にするところが教会共同体である。この共同体での生活と活動によって、あの永遠存在を思念し、“生成と永遠の合一”を実現することが可能となる。それはこの共同体において、言はば真実の人間性が回復されることでもある。このようにわれわれは、この共同体の中で絶えず繰り返し、真の自己自身に立ち帰る努力をしなければならぬ。「教会において自己自身であり得ないような者は、だれも誠実に生命の通った学問をすることはできない」(S. 59)、“とヒドワードは言う。教会共同体に限ったことではなからう。いずこにおいてであれ、自己自身であり得ないような者の学問、生活全体は、虚構の上に成り立っているものにすぎないのであらう。

われわれの人間性回復の願いが、自ずと教会共同体を誕生させ、そこに「人間の光」(S. 59) となるべき「神人

(Der Gottmensch)」(S. 59)の誕生をみるにいたる。根源的には神から生れ、同時に人間の息子であるこの救い主の名において、宇宙の一斉のものを祝福することができる。われわれがこの共同体において、自己自身となる、すなわち「生れ変わる」(S. 59)ことができるのも、「祈りと愛」(S. 60)とを本質とする彼の名においてである。この偉大な勇者の生誕を讃美して祝祭が生れる。それゆえに、われわれはこの祝祭を「新しく生れ変わろうとする世界の喜びの普遍的な鼓動」(S. 60)として謙虚に耳を傾けなければならない。

四

この対話篇の最後に登場するヨーゼフは、今宵の祝祭をひたすら幼な子のような心で迎え、讃美して、「これまでになかったほど、いま鎮められて、すばらしい世界に新しく生れ変わったような気持がいたします。この新しい世界には、苦しみや嘆きは通用いたしません。わたしはすべてのものに、深い痛手を負っているものにも、喜びの眼差しを注ぎます。キリストが教会以外には一人の花嫁も、友達以外には一人の子供も、聖堂や世界以外には一軒の家を持たず、聖なる愛と喜びとに満ち溢れた心の持主でありましたように、わたしもまたその方を仰ぎみて、努力するように生れついているように思えるのです」(S. 61)とその心情を吐露するのみである。⁽⁴⁾「言葉にし得ない喜び」(S. 61)を彼にもたらされたその方は、今や彼を優しく抱き包み、あらゆるものに愛と好意を寄せ、親愛の情をこめた愛撫と接吻とを可能にさせるのであった。

注(1) 使用したテキスト『Die Weihnachtsfeier』Baselの頁数を示す。以下同様。

(2) エールツム山岳地方でよく見られたクリスマの細工物で、キリストに関係のある人物や事跡の模型を、ろうそくの火や水の方で動かす仕組みになっているもの。(『Keine Schriften und Predigten』 Band I. 1970. Berlin S. 454.)

(3) シュライエルマツヘルのパルビー時代(一七八五～一七八七)には、すでに『ヴェルテル』など彼の愛読書となっているが、一八〇五年八月三日、ヘンリエッテ・ヘルツに宛た手紙の中で、「彼(ゲーテ)は尚ほ今でも最も立派な且つ最も人づきのする人物の一人であることは確かです。」とゲーテに会った感想を述べ、ゲーテはゲーテで、シュライエルマツヘルを評して、「ああこれは立派な友だちだ。私はすぐ会わなくてはならない」と云ったと伝えられ、彼等には心通じ合うものがあり、思想的に共鳴するところがあったようである。(拙稿『シュライエルマツヘルの教育思想』キリスト教主義教育思想講座、一九七五、関西学院キリスト教主義教育研究室)

ここにシュライエルマツヘルの云う断念(Die Entsagung)は、ゲーテの『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』にあらわれる「断念」あるいは「断念」(Die Entsagung)と相通するものがある。ゲーテは、なにか一つのことを完成させるために、その一つのことにより自己を集中・制限して、その他のすべてを断念すべきである、という。事実彼はその小説の中で、ウィルヘルムにさまざま遍歴をさせた後、外科医となって病める人を救うため、そのほかのこと一斉を断念させ、専ら外科医になるために自己を集中・制限させている。

シュライエルマツヘルは、この小品の中で、一カ所ゲーテから直接引用している。「離婚したり、改宗したりするような人柄には、常に染がくつついている」。

(4) プラトンはずでに、『国家』編で音楽と体育が、自由人の教育の基礎である、と主張している。彼のいうところの音楽(*ψη μουσική*)は、今日のいわゆる音楽以上のものであって、シュライエルマツヘルによると、「自意識の内的感動と直接関係のあるすべての芸術」(Vorlesungen über die Aesthetik 1974, Berlin S. 428)を云うので、それは広く文芸と音楽との総称であると考えられてよい。

(5) マルコ、一〇、一五。

(6) 「老」については、『独語録』(Die Monologen, 一八九九)、第五のモノローグ「若さと老い」の中で、美わしき老いが「老年と青年との精神的結びつき」によって可能になる、と語っている。

(7) 最初と最後の「幼な心」。

- (8) 事実、シュライエルマッヘルは『教育学講義』(Die pädagogischen Schriften, 1826.)の中で、教育の目的として共同体の構成員の育成を掲げるのであるが、その共同体は、国家、学問、宗教、交友の四共同体に分類される。前二者は男性に、後二者は女性によりふさわしい共同体である、という。したがって女性は、その本性上、主として家庭共同体において、子供達の宗教(芸術を含む)、交友に関わる心情や感情を養育育てることが、女性としての教育的役割を果たすことになる。
- (9) この話は、シャルロッテ・フォン・カーテン(シュライエルマッヘルの妻の姉妹)の友達の身の上におこった事実に基づいている。話しの内容が、丁度彼の母性観、新生観に恰好のものであったため、またカーテンの友達の記念のしるしとして、ここに取り入れられたようである。
- (10) ヨハネ、五、二四。
- (11) シュライエルマッヘルは、ここでプラトンの対話篇『Symposion』のことを考えている。この当時、彼はこの篇の翻訳をつづけてもいた。もっとも『Symposion』では、女性は一人も(ディオタイマを除いて)話し手として出てこない。それに対してここでは、男女各々三名づつが話し手として登場してくる。彼にとっては交友共同体が、主として女性に固有な領域なのであるから当然なことであろう。
- (12) 詩篇、二三、四。
- (13) ヨハネ、一、一〜一四。
- (14) シュライエルマッヘルは、キリストや友人との交わりを通して、うちに目覚めてくる“新しい人間”を、ヨゼフに託してここに描き出している。

〔使用したテキスト〕

- (1) Friedrich Schleiermacher 『Die Weihnachtsfeier』 Basel.
- (2) Friedrich Schleiermacher 『Kleine Schriften und Predigten』 Band I, 1970, Berlin.

〔参考文献〕

- (1) Friedrich Hertel 『Das theologische Denken Schleiermachers』 1965, Zurich-Stuttgart, S. 205—210.

- (2) Wilhelm Dilthey 『Leben Schleiermachers』 1922, Berlin und Leipzig. S. 765—798.
- (3) Friedrich Schleiermacher 『Vorlesungen über die Aesthetik』 1974, Berlin. S. 366—429.
- (4) 渡辺泰三『シェライホルマッヘル』昭和十三年、弘文堂。